

『ロールシャッハ法のイメージカード選択に関する
心理臨床学的研究』

(論文要約)

石井 佳葉

2021 年

(論文要約)

心理検査の1つであるロールシャッハ法は、1921年に『精神診断学』の中で Hermann Rorschach によって発表された。この検査では、被検者にインクのしみが描かれた10枚のロールシャッハ図版(カード)を提示し、何に見えるか、どのように見えるのかを列挙させる(自由反応段階)。一通り反応を終えた後で、1枚目のロールシャッハ図版から順に、各反応について説明をしてもらう(質問段階)。これらの反応をスコアに置き換えて数量的に分析するとともに、反応語や検査態度について質的に分析することによって、被検者のパーソナリティ特徴を理解することができる。

ロールシャッハ法を用いた臨床実践と研究が積み重ねられる中で、影に隠れてきた部分も少なからず存在し、その1つにイメージカード選択が挙げられる。イメージカード選択とは、ロールシャッハ図版の中から、被検者に、好き、嫌い、父親、母親、自分などのイメージに合うカードを選んでもらい、その理由を聴取する手続きを指す。ロールシャッハ法において、自由反応段階、質問段階は原則として省略の認められない標準的な手続きであるのに対して、イメージカード選択は検査者の裁量で変更が可能となっている。そのために、イメージカード選択は付加的な位置づけにあると見なされてきた。

本論文は、「イメージカード選択において被検者がどのように心を動かし、どのように反応を産出しているのか」を明らかにすることで、この手続きの有用性を示そうとしたものである。そして、イメージカード選択の心理臨床的意義に迫ることにより、ロールシャッハ法を通じた心理アセスメントを補完しようとする試みである。

序章では、本論文でイメージカード選択をとり上げることの必然性について論じた。そもそも、ロールシャッハ法においては、数量的な分析と、被検者の反応語や検査態度に着目する質的分析の両方が求められる。それを可能にする手法として「継起分析」が知られており、特に、精神分析の自我心理学的な立場の臨床家から注目されてきた。継起分析では、10枚のカードの流れや、各カードにおける自由反応段階から質問段階における反応の流れに沿って、被検者の心の動きを読み取っていく。

しかしながら、継起分析に関して、自由反応段階・質問段階の後に導入され

るイメージカード選択までを含めて、十分に検討されてきたとは言えない。イメージカード選択では、自由反応段階および質問段階と異なり、「インクのしみに何かを見いだす」という課題から解放される。検査状況に著しい変化が生じるため、イメージカード選択で得られたデータについて、結果分析に直接用いられることはない。

見方を変えるならば、自由反応段階からイメージカード選択に至るまでの被検者の反応変化を捉えることで、多面的な理解が可能になるものと期待される。さらに、ロールシャッハ法における時間的な継起にも着目する必要がある。イメージカード選択は、検査者と被検者のやりとりが重ねられた後に導入されるため、それまでに形成された検査者と被検者の関係性が反映されやすいと考えられる。

そこで、第1章では、ロールシャッハ法を通じた対人関係理解に焦点を当て、本論文における解釈の枠組みを示した。まず、スコアについて、人間像に関する人間反応および人間運動反応、色彩反応、部分反応領域をめぐって、対人関係理解の仮説が提唱されてきたことを概観した。数量化をめぐる信頼性や妥当性に関して疑義が寄せられることもあるが、スコアそれ自体が対人状況における反応なのである。

第1章の後半では、対人状況としてのロールシャッハ法の特徴について整理を行い、検査者の影響を排除しなければならないとする考え方と、検査者と被検者の関係性の中で理解していく、という立場をとり上げた。近年では、ロールシャッハ法の継起分析を通じて、精神分析臨床における解釈の方法やタイミングの決定に活かされた事例が報告されている。また、被検者の反応特徴や開示性をもとに、その後の治療過程で、被検者（クライアント）が自分自身について治療者とどの程度共有が可能であるか検討されている。このように、ロールシャッハ法においては、検査者－被検者の関係性を含んだ心理アセスメントが重視されていることを指摘した。

第2章では、イメージカード選択が実施されるようになった歴史的背景を整理し、関連する研究報告が少ないことの要因について論じた。1945年にIVカードに父親、VIIカードに母親の各イメージとの関連が指摘されて以降、それを確かめる手法としてイメージカード選択が実施されるようになった経緯を整理し

た。しかし、特定のカードと父親、母親イメージを結びつける解釈仮説の多義性と、それを確かめる方法論の問題から、米国においてはこの仮説にほとんど関心が寄せられなくなっていた。

一方で、本邦の臨床実践においては、解釈仮説の妥当性検証とは異なるイメージカード選択の立場が生まれた。例えば、被検者の選択したカードの語りを深めることで心理療法的に扱うアプローチ、あるいは、選択されたカード同士の関係性や情緒的な側面の検討から、被検者の対象イメージを捉えるアプローチなどが散見される。すなわち、イメージカード選択について、被検者の内面世界を理解するための臨床的な手法としての価値が見出されてきたのである。その点を強調するため、本論文では「イメージカード選択段階」と命名し、検討を進めていくこととした。

イメージカード選択段階の実態を把握するため、第3章では2つの調査結果を提示した。第一調査として、臨床心理士を対象にイメージカード選択段階の「実施状況」、「学修機会」等に関する質問紙法を実施した。その結果、対象者の90%以上がイメージカード選択段階を認知しているにもかかわらず、その教示内容や解釈の視点について、検査者間で統一した見解が存在していないことが明らかとなった。その背景として、イメージカード選択段階が付加的な位置づけにあるために、学修や情報共有の機会が十分に提供されてこなかったものと推察された。

第二調査では、34名の調査事例をもとに、イメージカードの決定に要する時間と、選択理由のコーディングについて統計的な分析を行った。まず、時間に関して、セルフ・イメージカードでは、父親イメージカードよりも有意に選択に遅れが生じることが明らかとなった。その背景として、セルフ・イメージカードに関しては、自分自身のイメージを表現する際に、検査者にどのように思われるかという不安や、社会的望ましさにかかわる心性などが影響していると考えられた。また、選択理由の特徴について、母親イメージカードではより抽象的に語られる傾向、セルフ・イメージカードでは知覚した反応内容を用いて典型的に説明する傾向が示された。

ここまでは、被検者から得られたイメージカード選択段階の結果について、被検者の内面がそのまま反映されているものと見なして扱っている。しかしな

がら、ロールシャッハ法の中で被検者の心はさまざまに揺れ動いていると考えられており、イメージカード選択段階においても例外ではない。

そこで、第4章では、イメージカード選択段階における被検者の心的力動を検討するため、セルフ・イメージカードに着目した。具体的には、被検者が自分自身をポジティブなイメージとして表現した場合、すなわちセルフ・イメージカードと最も好きなカードが一致していた事例をとり上げた。そこに潜む被検者の心の揺れ動きについて、検査者との二者状況における被検者の体験を参照しながら、探究することとした。

まず、日常生活における被検者の対人状況の体験を把握するため、友人との二者、三者以上の状況のどちらで難しさを感じるかについて選択を求めた。二者状況で難しさを感じる群（5名）、三者状況で難しさを感じる群（13名）、非選択群（5名）におけるロールシャッハ指標を比較した。その結果を踏まえ、イメージカード選択段階を含めたロールシャッハ法の事例検討を行った。4事例のうち3事例では、セルフ・イメージカードと最も好きなカードが一致していたにもかかわらず、そこにポジティブな情緒がうかがわれなかった。すなわち、被検者が指定されたイメージカードを答える際に、検査者の指示に沿った反応や、社会的に受け入れられやすい反応を示すとは限らないのである。

また、検査者との二者状況の中で、検査者に心的に接近することをめぐる葛藤や不安も、被検者の反応に影響を及ぼしている可能性が示唆された。こうした被検者の心の揺れ動きが、イメージカードを決定する段階と、その理由を説明する段階の中で現れてくると考えられた。

そこで、第5章では、イメージカード選択段階を細分化し、その反応過程に沿って、被検者の内面世界で生じている心的力動を明らかにすることを目的とした。中井久夫によれば、ロールシャッハ法そのものは、風景構成法のように各アイテムを順番に構成していく過程（シンタグマ的）とは異なり、インクのしみをもとに被検者が自由に概念を選び取る過程（パラダイグマ的）であるという。イメージカード選択段階では、イメージを想起する際にはパラダイグマ的であったとしても、イメージとカードを照合し、その理由を論理的に説明する際にはシンタグマ的な反応になると考えられた。

被検者がさまざまに心を動かしながら、イメージカード選択段階に取り組む

以上、その一連の反応に歪みが生じうる。第5章の後半では、9名の父親イメージカード選択に関する調査事例を通じて検討を行った。その結果、一部の事例では、選択理由を語る中で、被検者自身が付与した反応内容に全く触れられない、あるいは、反応内容に完全に合致した内容に終始する、などの不自然さが示された。いずれもパラダイグマ的な選択過程を回避していると考えられるが、被検者がこの選択過程とシンタグマ的な選択過程のバランスをどのように維持しているのかについて検討しなければならない。こうした視点から解釈を行うことにより、異なる被検者間で、似たような反応内容の、同じカードが選択されたとしても、その背景に潜む被検者の自我の働きや情緒体験を含めて個別的に理解することが可能となる。

第6章では、イメージカード選択段階の心理臨床実践への活用を目指すにあたり、臨床群として、発症初期の摂食障害女性の調査事例をもとに検討を行った。検査者との二者状況における反応を検討するため、ロールシャッハ法だけでなく、検査者不在で回答された精研式文章完成法の結果も参照した。

ロールシャッハ法では、摂食障害に関する先行研究と同様に、本章の一部の事例においても外的刺激を回避する傾向が示された。抑制的なロールシャッハ・スコアが得られた場合、標準的な手続きのみでは被検者理解が不十分となる可能性が高い。そこで、自由反応段階、質問段階の後のイメージカード選択段階までを捉えることが重要となる。この一連の過程において、刺激への慣れや検査者とのやりとりによって、検査者や検査状況をめぐる被検者の不安が変化する可能性が明らかとなった。

このように、イメージカード選択段階はロールシャッハ法の最後に導入されるため、被検者の変化を力動的に把握できる。さらに言えば、イメージカード選択段階における被検者の反応に着目することで、自由反応段階・質問段階で得られた仮説を修正したり、裏付けたりすることが可能となる。

第7章では、これまでの章における論考や調査研究、そして他のアセスメントツールとの比較検討を踏まえ、心理アセスメントにおけるイメージカード選択段階の方向性を提示した。まず、第4章から第6章の事例をもとにフローチャートを作成し、「被検者がどのようにイメージカード選択段階に取り組んでいたのか」を検討してから各イメージカードの解釈に進む必要性を論じた。な

ぜなら、イメージカード選択段階では、被検者の自我機能や、検査者－被検者の二者関係に影響を受け、多種多様な心の動きが生じるからである。

また、イメージカード選択段階の特徴を明示するため、自由反応段階・質問段階との比較を行った。「何に見えてもよい」という教示と異なり、選択してもらったイメージが指定される。そのため、イメージカード選択段階は、ロールシャッハ法の各検査段階の中で最も投映水準が浅くなると考えられた。さらに詳細に検討すると、自由反応段階から質問段階、イメージカードの決定とその理由説明には、共通の流れが存在することが明らかとなった。すなわち、いずれも「退行的な状態での反応」から「論理的に言語化する」という流れがあり、自由反応段階・質問段階と、イメージカードの決定・理由説明における被検者の反応を比較検討することができる。

こうした特徴を踏まえ、第7章の後半では、教示内容、イメージカードの実施手順、検査者－被検者の相互作用をとり上げ、イメージカード選択段階の実施の在り方について検討を行った。ロールシャッハ図版の退行促進的な刺激と、検査者との二者状況によって、被検者は防衛を強めたり、情緒的な混乱を示したりする。こうした様子を前に、検査者自身も心を揺さぶられながら、被検者の自我機能を含めた心の在りようを理解していくことが重要であると指摘した。ただし、これらの点については、今後の臨床実践の中で吟味されなければならない。

そこで、終章では本論文の総括を行ったうえで、臨床実践に繋げるための課題を指摘した。周知の通り、臨床実践においてロールシャッハ法は被検者理解のために実施される。イメージカード選択段階を被検者理解に役立てるためには、「検査者の裁量で導入できること」の意義と、使いこなしの難しさを理解しておかなければならない。検査者は標準的な手続き（自由反応段階、質問段階）を通じて、被検者に関する仮説を持つことができるだろう。それに従い、尋ねるイメージカードの順序や、教示の伝え方について吟味し、被検者に合わせた形でイメージカード選択段階を導入していく。この一連の作業自体が多角的多面的な心理アセスメントであると同時に、被検者に寄り添った形でロールシャッハ法を終えることにも繋がるのである。

最後に、本論文の課題として、調査事例のみの提示にとどまり、切迫した臨

床実践における検査者－被検者の関係について検討できなかったことを指摘した。また、フィードバックを含めた検討も不十分であった。ただし、こうした課題が導かれたことも含め、本研究の知見はロールシャッハ法の臨床的可能性をさらに拡充するものと位置づけられるだろう。